

日本古建築研究の棗 (第三十五回)

天 沼 俊 一

第三十四 窓 (下の上)

(ハ) 花狭間窓

花狭間 (Hana-sarai) とは、元來花形模様をついた格狭間をいつたのであるが、夫れから轉じて遂に「花欄間」をも、さう呼ぶ様になつたと『建築字彙』にかいてある。とにかく第三二五圖等に示したやうな美しい格子を花狭間といふので、それが窓の格子として、即ち狭間飾として入つてゐるから、それでこゝには「花狭間窓」といつておくことにしたのである。

此種の窓の古い實例は餘りない。新しい時代のものには、例へば日光東照宮又は同大猷院廟透塀の格狭間型の窓の如く、或は後者の幣殿本殿花頭の窓の如く、花狭間を入れたのがある。窓ではないが、同東照宮拜殿石の間本殿等の棧唐戸の上の方が、広い間には吹寄せ棧の花狭間が入つてゐる。

此種の窓はいつ頃からあつたか。我國で考案されたか、夫れとも外國から來たか。といふことを考へてみると、今のところ私は花頭窓と同じやうに支那から輸入されたものと思つてゐる。それは

いつもよく引合にだす東福寺の卷物で、あの中に「衆寮聖僧宮殿」と記した厨子の立面圖が、幼稚で且つ粗末ではあるが、どこからどこ迄洵にうまく唐様の氣持をだして描いてある。そこに立派な花狹間が用ひてあるところをみると、窓にだつて用ひてあつたことが容易に想像できる。さうして恐らく禪宗と共に鎌倉時代に宋の國から傳來したと考へるのが最も穩當なやうである。故に鎌倉時代より古いのは無い筈である。

次に實例に移るが、何分遺物が少ない——其實澤山とまでいかなくとも、相當にあるのかも知らないが、あるかないかを私が知らない——から、鎌倉以降各時代の例を一つ擧げて記すことはできぬ。僅かに二三を圖示するに過ぎぬのである。

第三二五・三二六圖は永保寺開山堂禮堂の窓である。この窓の花狹間は惜しいことに修理の時、破損の程度がどの位であつたか知らぬが、全部新

材にかへられ、古い材料はまるで残つてゐない。故に當初からかうであつたか、又は後に現在の如くにしたのか、其邊が不明なのである。けれどもかゝる窓は鎌倉時代からあり得たし、この建築のできたのが文保二年だから、といふ理由で、これを當初からの様式のまゝとしたいのである。この花狹間も亦、此の建物の扉の場合と同様、四間一花の割で花模様をつけたのである(第十二卷第一號第一二三圖及同號第一三六頁)。
解説参照)

此狹間飾の一部分をこはして盜で行く人があるとかで、寺ではこれに全部鐵網をかぶせてしまつた。盗んでみたところ何にもならぬ新しい花狹間を、そつくりまるごとなら未だ判つてゐるが、一部分盗んで何にするつもりか。併しかうして嚴重に保護してあるのをみると、事實に違ひない。江州の少なくとも神崎郡あたりでは、新しくできた石碑の角をかいてもつてゐると、勝負事にかつと

いふ迷信があつて、大概新造すると被害がある。そのため大袈裟に丸太をたて鐵網をはり、而も其鐵網を二重にして新しい五輪塔を保護してゐる實例をみたことがあるが、花狭間を盗むと同様にばくちにでも勝つといふのか、まことにあきれた言語道斷の仕業である。

網で覆へば被害はなからうが、其代り美觀は全然害されて殆んど其係を一變し、また内部からみても、美しいきゃしゃな花狭間の後ろに殺風景な金網が見えて、甚だ不愉快なものになつて了つた。併し幸にこの寫眞をとるとき、寺では特に邪魔な金網をはづしてくれたので、圖示した如き満足のできる——寫眞のうまさではない、鐵網のないことをいふのである——寫眞がとれたのである。

第三二五圖は外からみたところであるが、第三二六圖は同じ窓を内部からとつたもので、洵に美しい結果をみせてゐる。此圖の左方に寫つてゐる

扉上部の花狭間の中央に、横に太い黒線が見えてゐるのは、鐵網の入つてゐる枠を丈夫にするための鐵材がでゝゐるのである。この様な不體裁をしなければ、參詣者のいたづらを防ぐことができぬとはまことに困つた次第である。

第三二七圖はまた別種のもので、時代はずつと飛んで江戸になる。此をこゝへ入れるかどうするか可なり考へてみたが、たしかに花狭間の入つてゐる窓だから、序に解説を記しておくのである。

全體は正方形のあなに環つなぎ又は七寶つなぎを入れて、其内に一つづゝ満開の菊(?)花を入れてある。圓の数が縦横に五つづゝ合計二十五、從て菊花も亦二十五。此は福濟寺大雄殿のだから、支那式といへるであらう。永保寺のご全然形式を異にしてゐるために、まるで目先が變つてゐて、別種の窓の様に見えるのである。

*

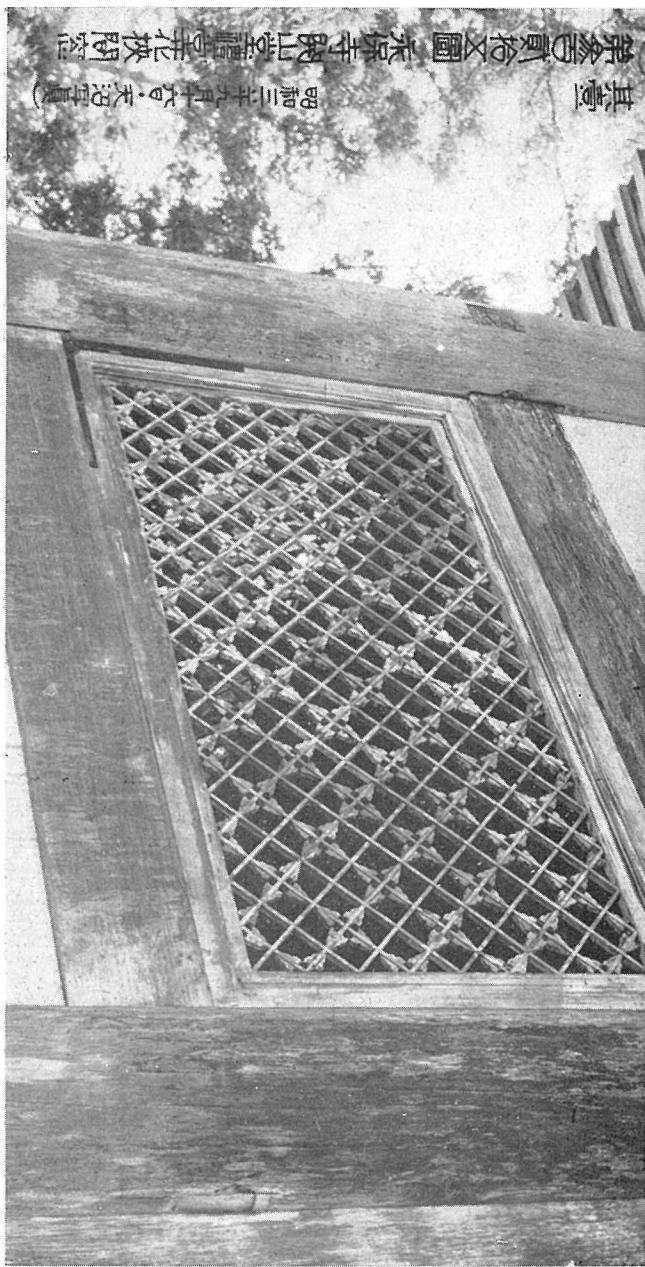
*

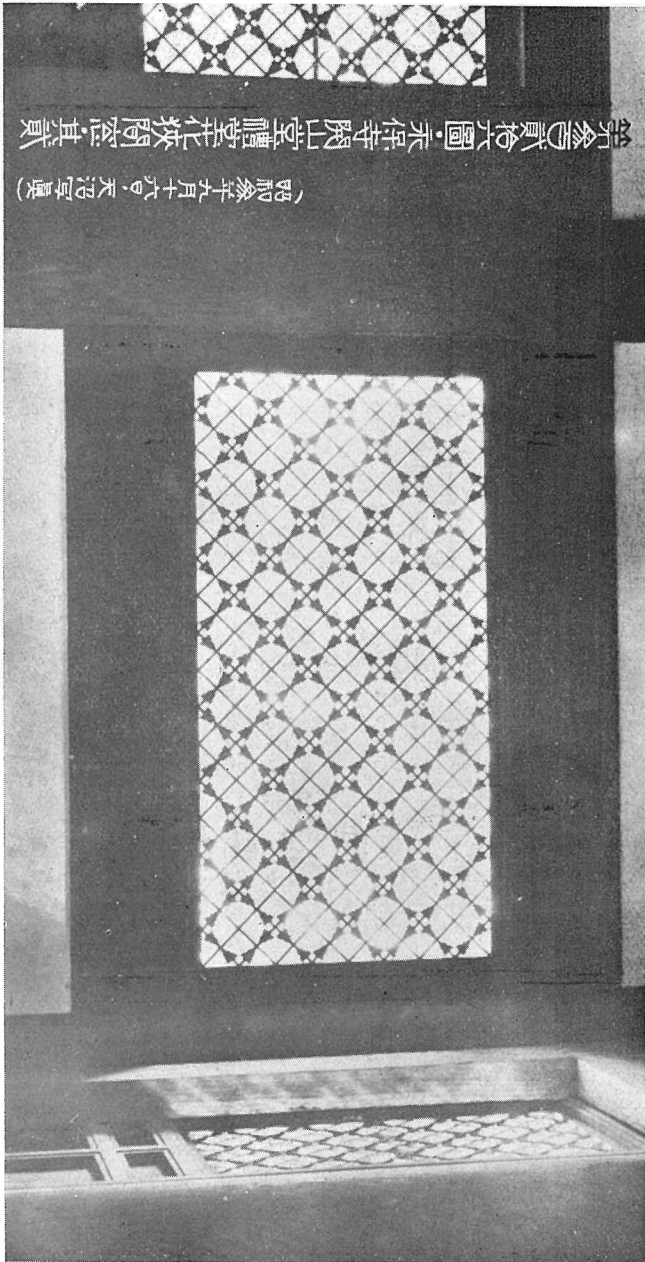
*

*

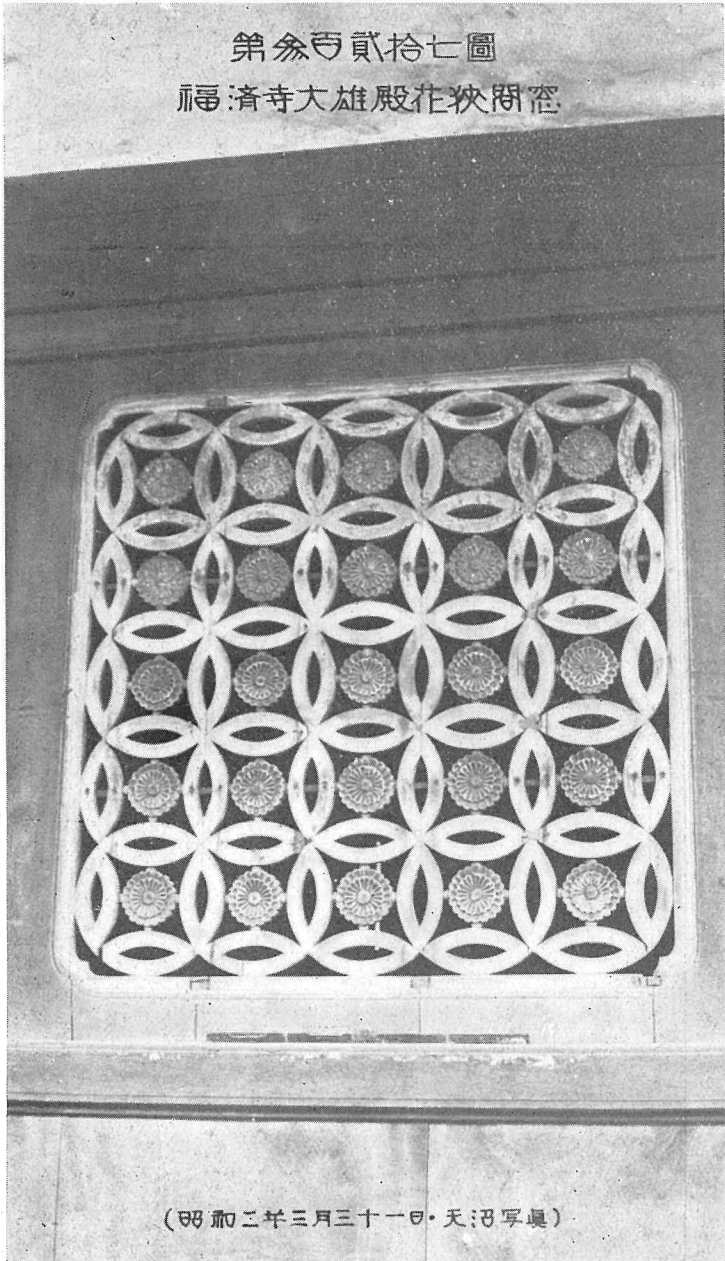
*

*





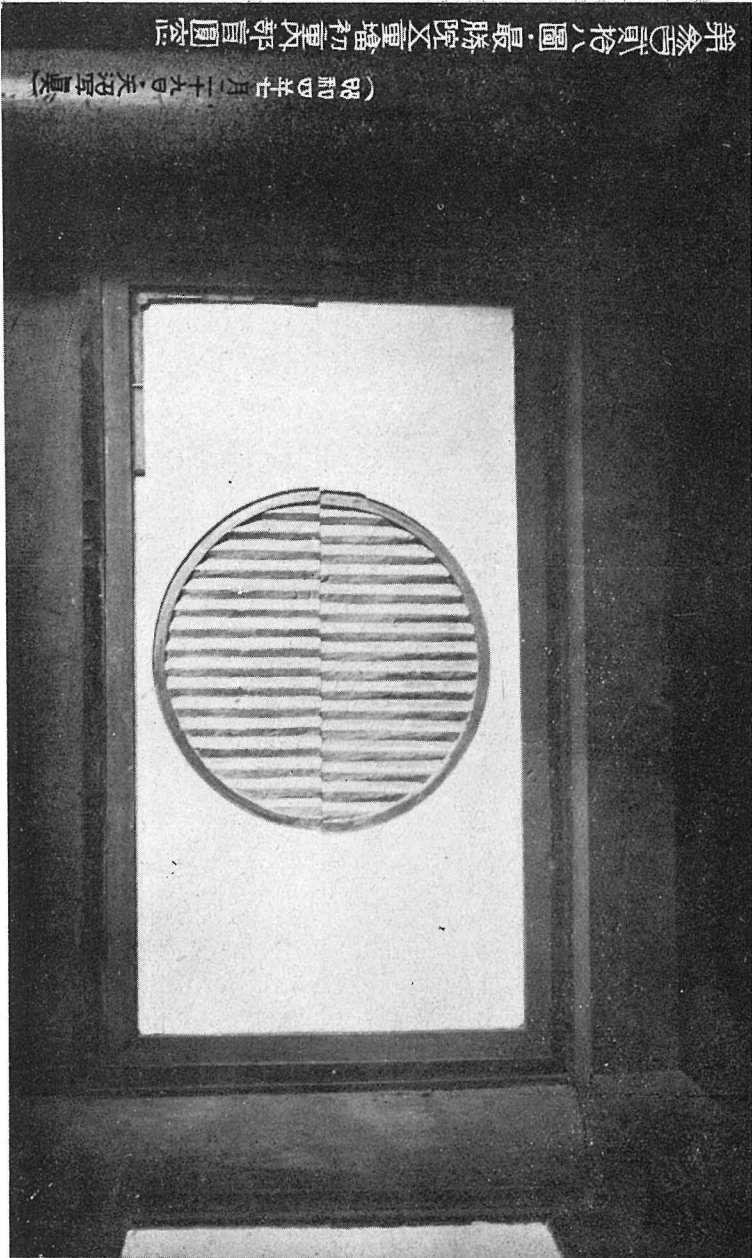
第七拾貳百參第圖
福濟寺大雄殿花狹間窓



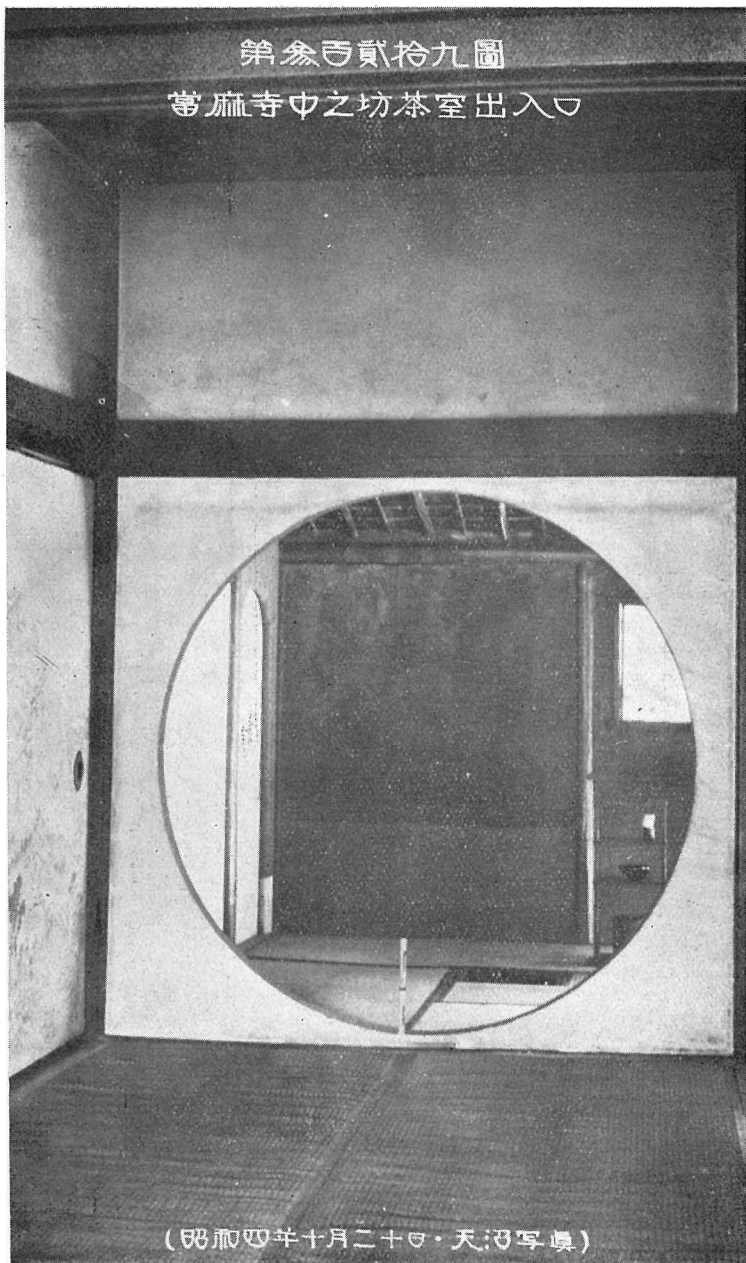
(昭和二年三月三十一日・天沼写真)

第參圖 槍八圖・最勝院之重壇初重内郭圓圖也

(昭和廿七年七月十九日・大塚實真)

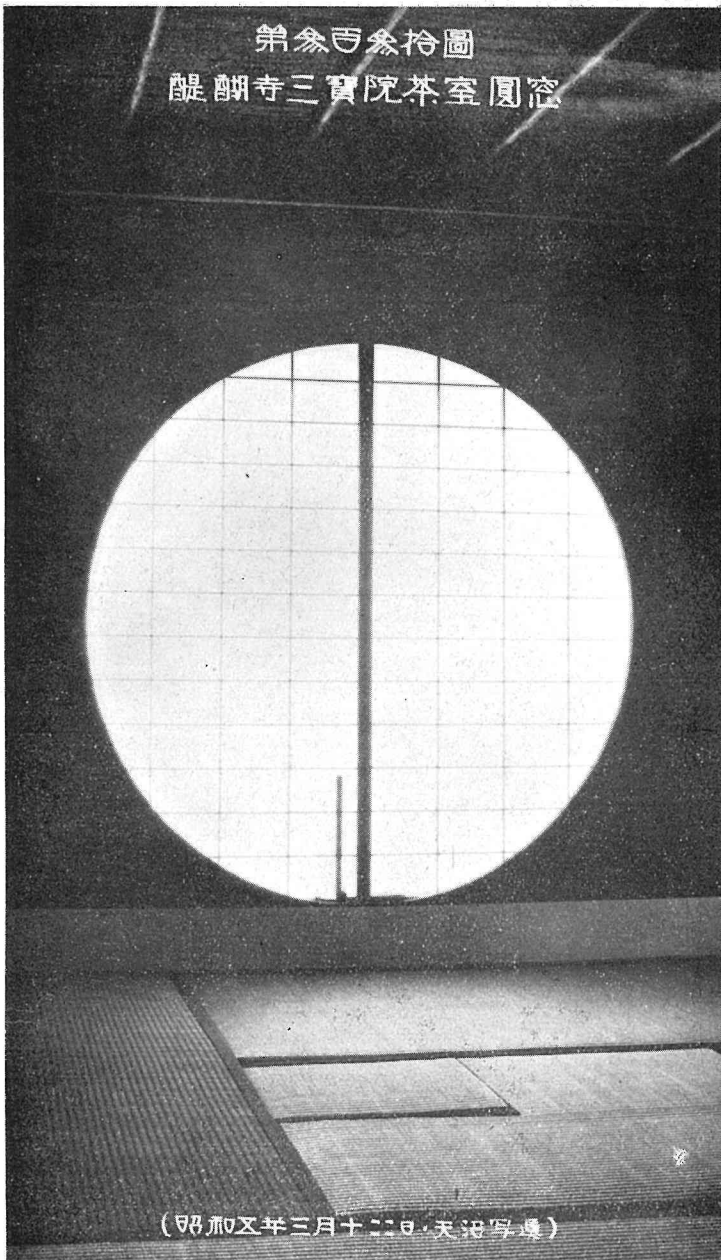


第九拾貳百參圖
常麻寺中之坊茶室出入口



(昭和四年十月二十日・天沼写真)

第參百參拾圖
醍醐寺三寶院茶室圓窓

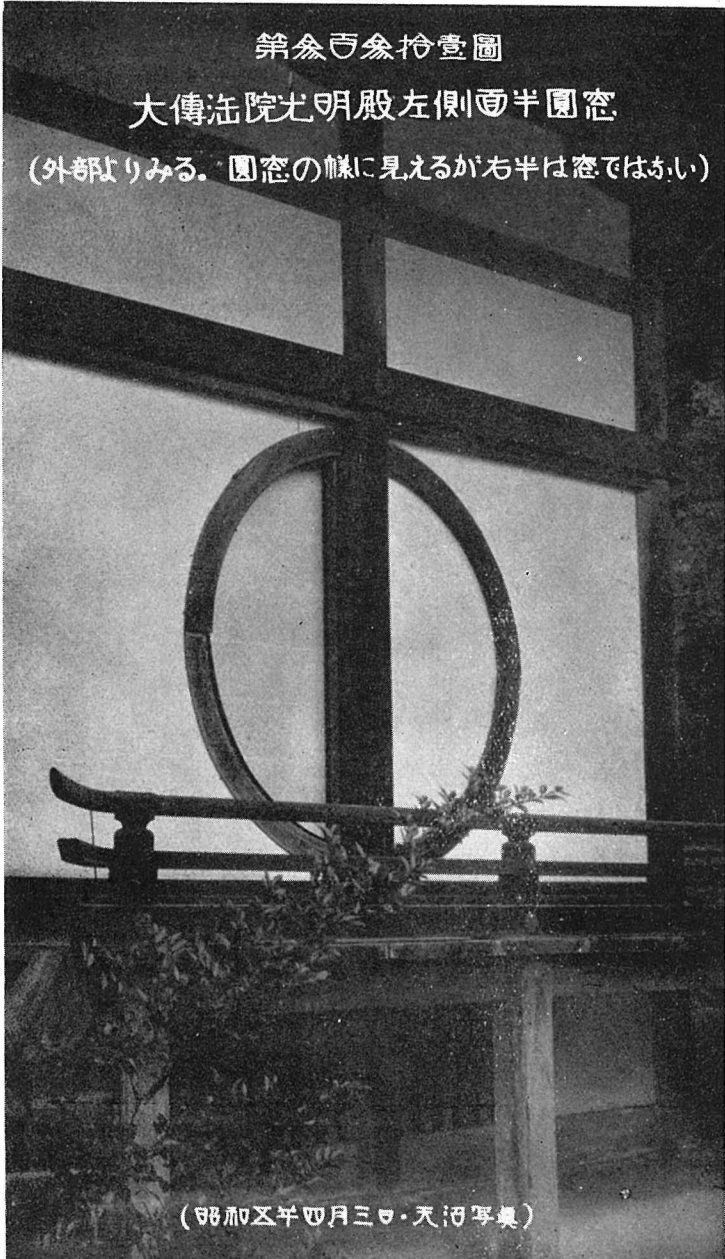


(昭和八年三月二十二日・天沼写真)

第叁百叁拾壹圖

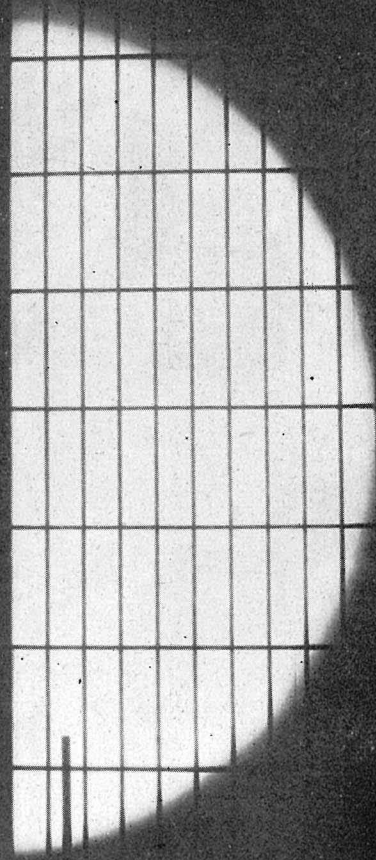
大傳法院光明殿左側面半圓窓

(外部よりみる。圓窓の幪に見えるが右半は窓ではない)



(昭和五年四月三日・天沼写真)

第參百參拾貳圖 大傳法院光明殿左側面半圓窓 其壹



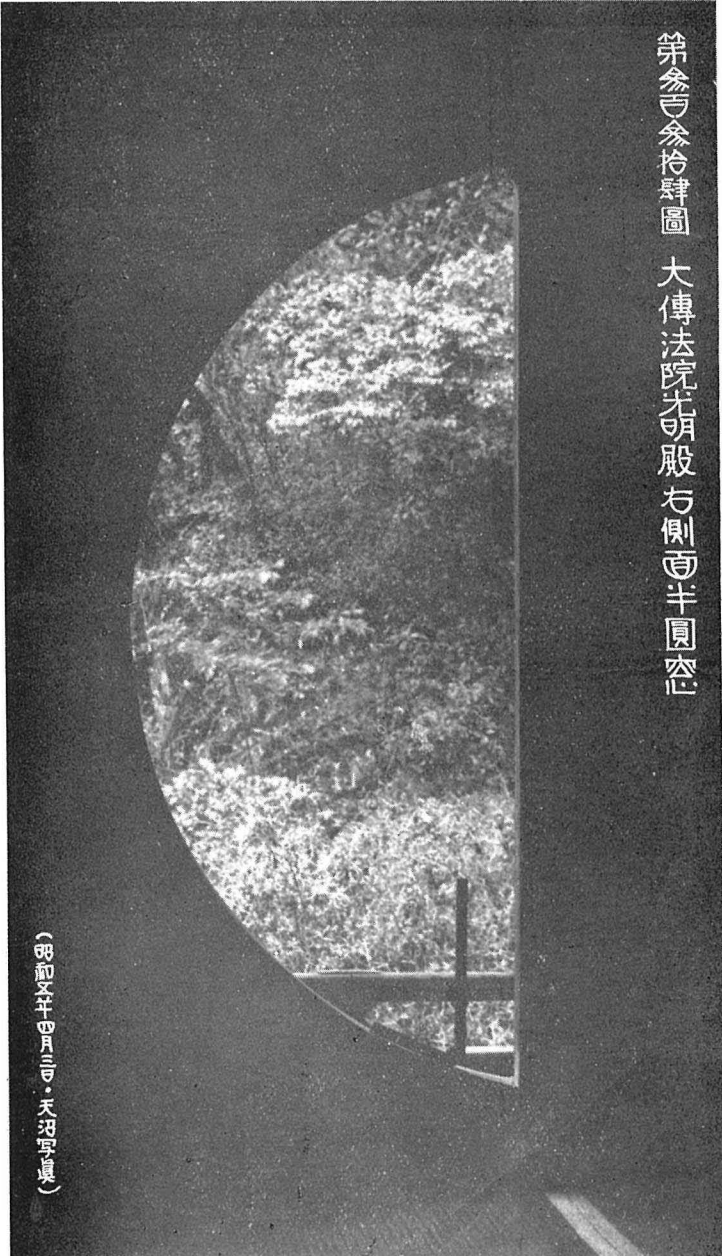
(昭和五年四月三日・天沼写真)

第參百參拾參圖 大傳法院光明殿左側面半圓窓 其二

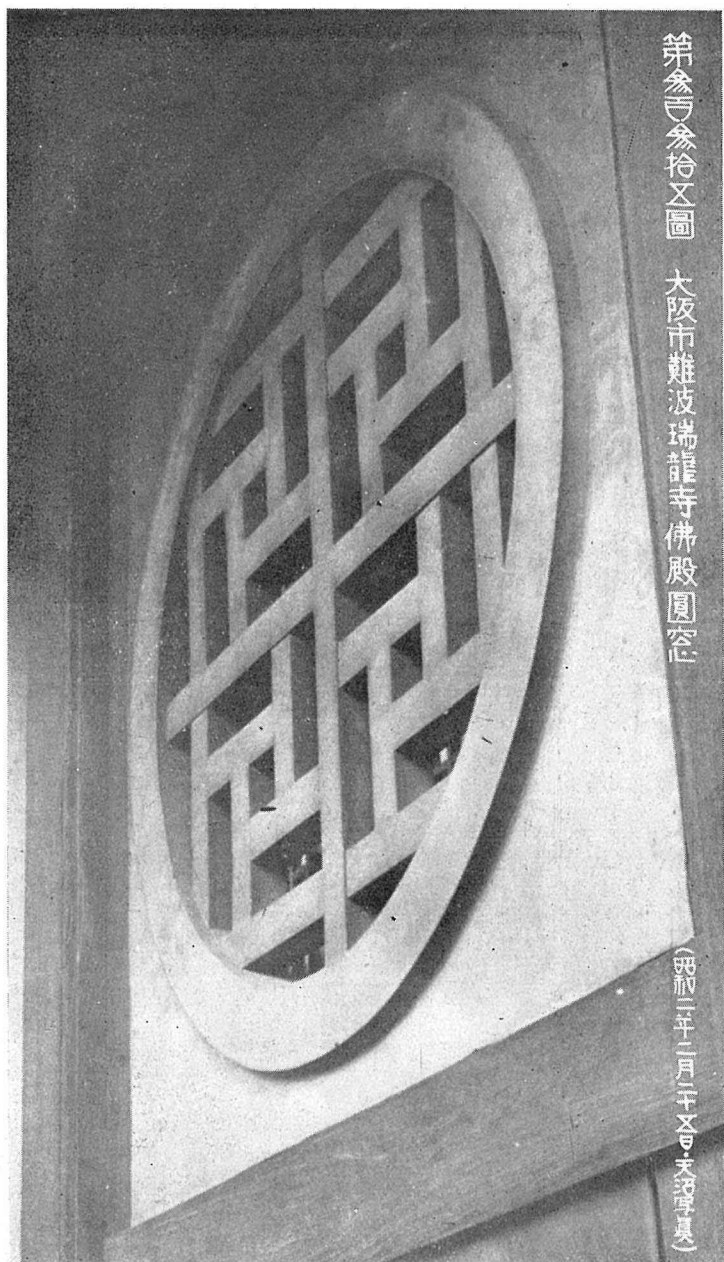


(昭和五年四月三日・天沼寫眞)

第叁百叁拾肆圖 大傳法院光明殿右側百半圓窓

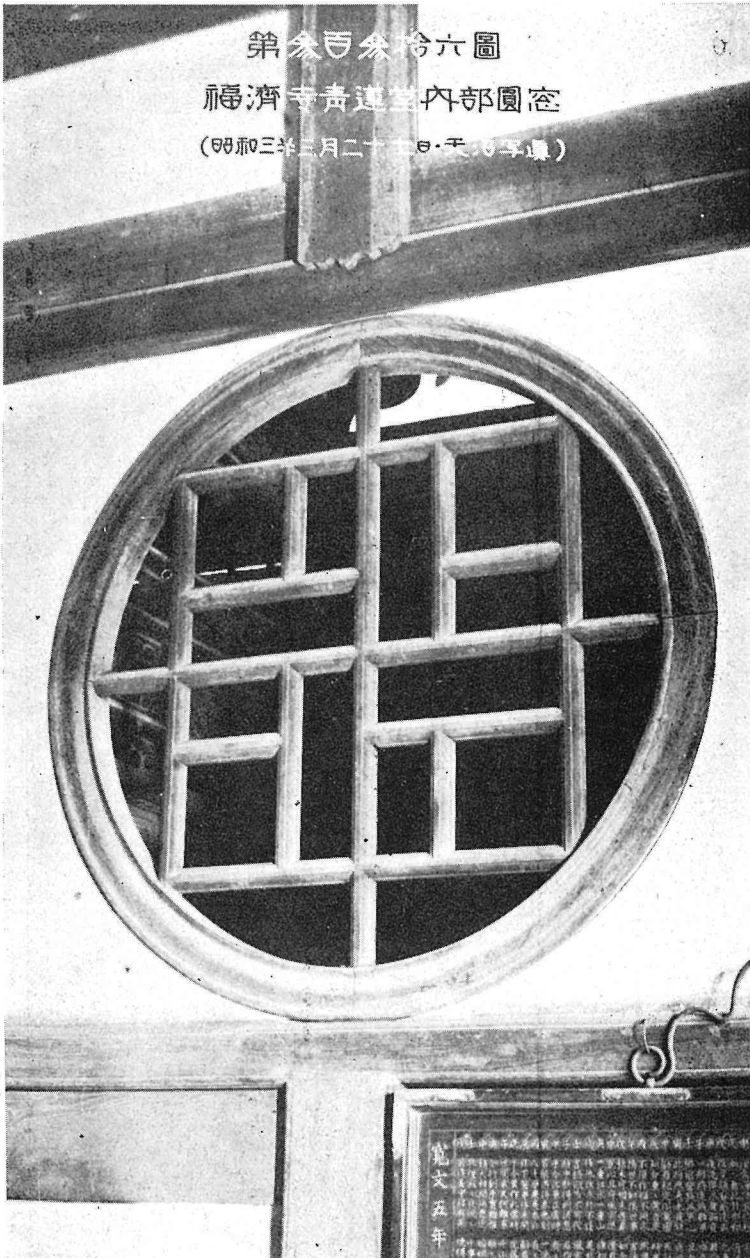


(昭和文庫四月三日・天沼写真)

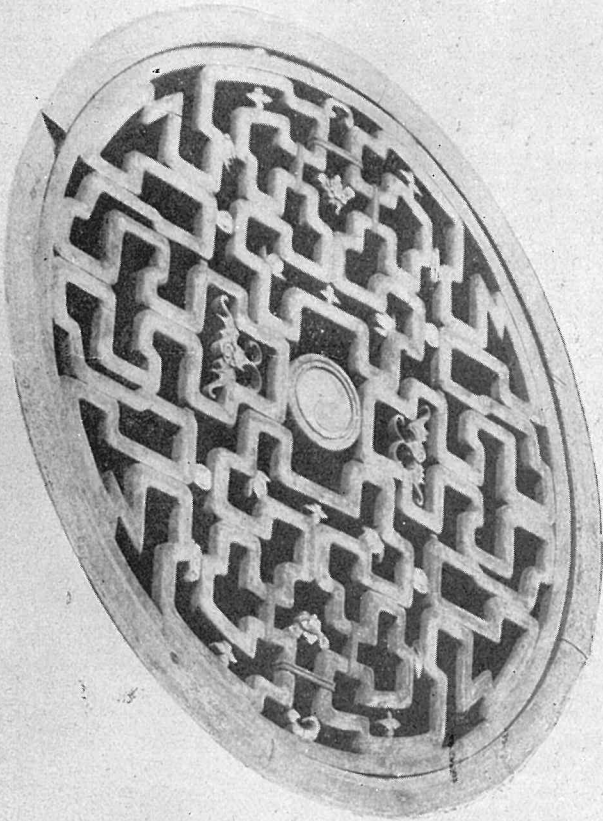


第參百參拾五圖 大阪市難波瑞龍寺佛殿圓窓

(昭和二十二年三月二十日・天沼實)



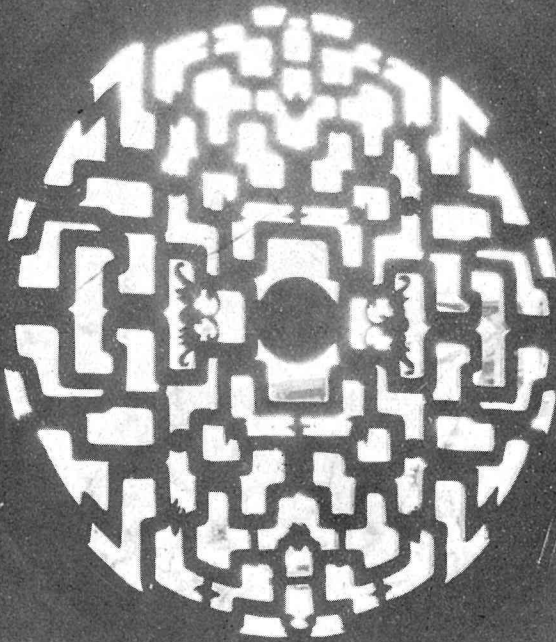
第七拾叁參圖
興福寺三缸會所門北側窓(其壹)



(昭和三年三月二十六日・天沼写真)

第八拾叁百叁第圖

興福寺三所會門北側窓(其貳)

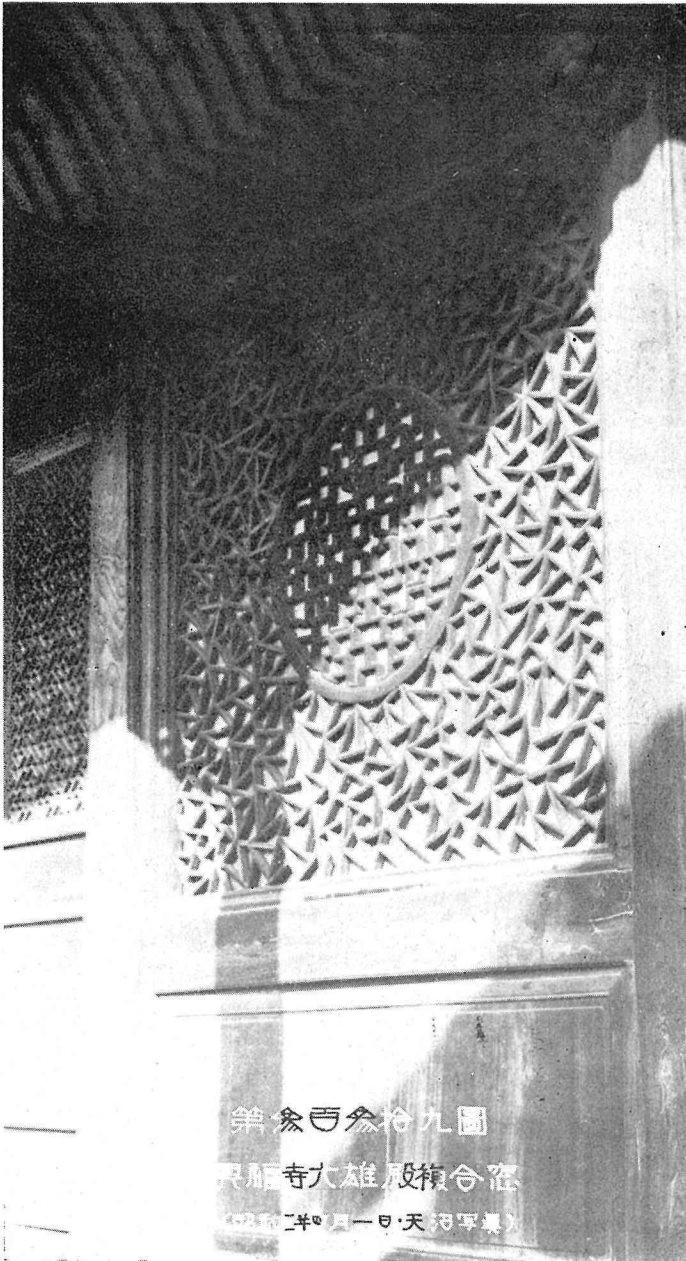


(昭和三年三月二十七日・天沼写真)

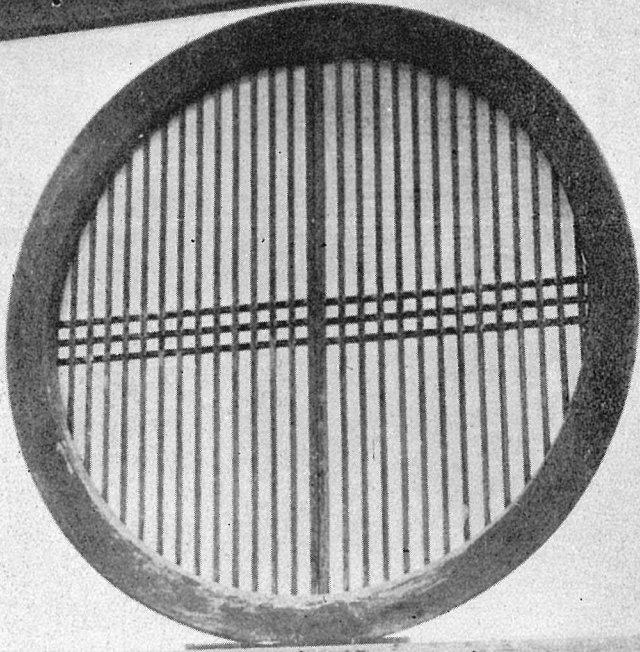
日本古建築研究の棗(卅五) (天沼)

第十五卷 第三號

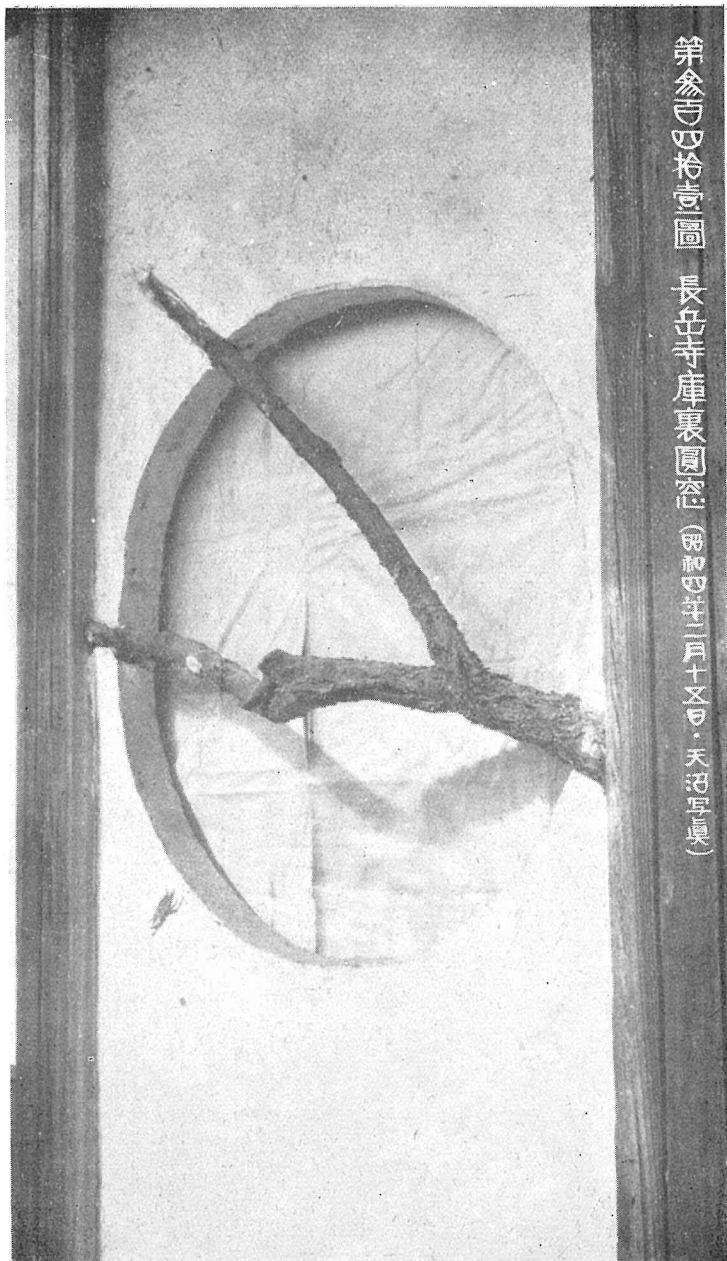
四三一



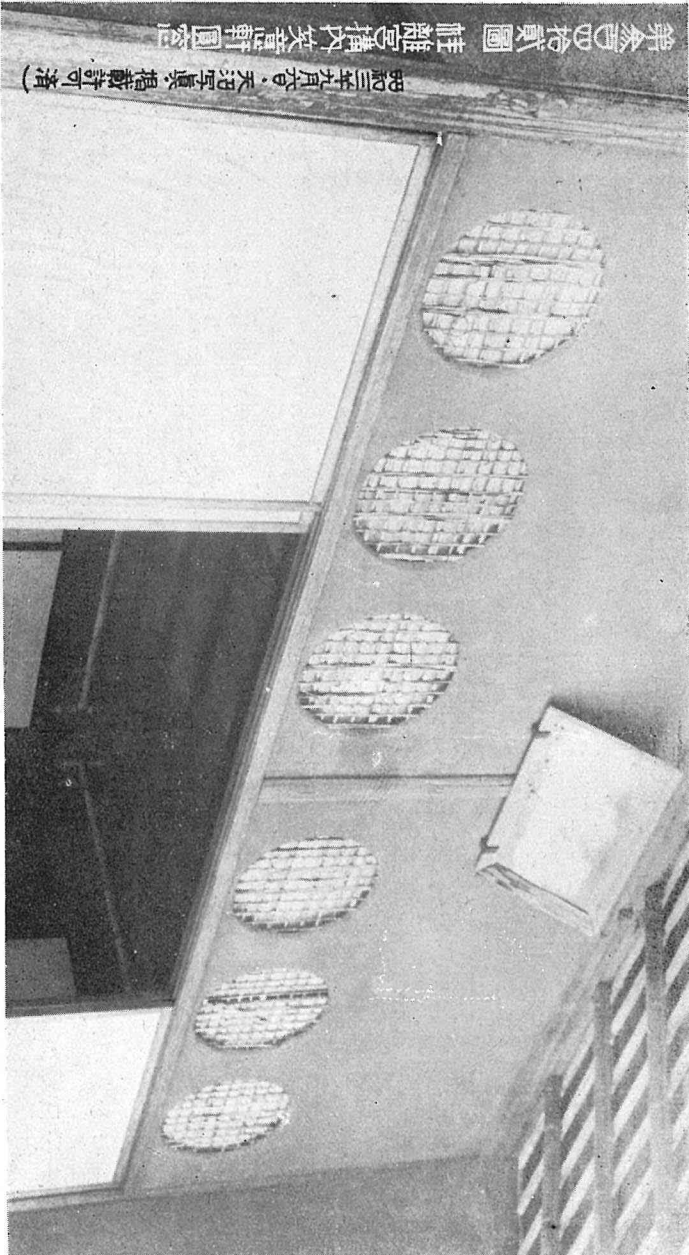
圖拾四第參
窓圓殿佛寺福萬



(昭和二年二月十三日・天沼写真)



第參百四拾壹圖 長岳寺庫裏圓窓 (昭和四年二月十五日・天沼写真)



美濃の棧敷圖 柱礎空構内空置軒圖

肥後県真谷、天沼宮原櫻蔵許(寺清)

花狹間窓は鎌倉時代に花頭窓と同じく支那よ

り入つてきたが、餘り用ひられなかつたやうで

ある。其輪廓は普通の連子窓の如く、其連子が

花狹間になつてゐる丈の差である。(永保寺開山堂禮堂)

江戸時代になると鎌倉系統のもあるが、また七

寶繫ぎに菊花の如き特殊なものも見出される(長崎福濟寺大雄殿)。

寺大雄殿。

* * * * *

割合にきゃしゃで美しいのに、なせ賞用されな

かつたかを考へてみると、破損し易いせいであつ

たからとも思へる。或は當時あちこちに用ひられ

たが、ちき壊れたりしたので、修理のときには再

びこの種の窓にしなかつたのかも知れぬ。とにかく

遺物は極く少ないことはたしかである。

(二) 圓 窓

狹間飾の形式はごうでもいゝ、其輪廓の圓形な

のをこゝに入れておく。

我國に於ける圓窓の起原は極く新しいのではあ

るまいか。極端かも知れぬが江戸時代——少なく

とも流行しだしたのは——からではあるまいか。

分廻しで圓をかき、其部分丈けをくりぬけば圓窓

ができるのだから、随分古かるべきであるのに、

どういふものか見當らぬ。民家にはあつたかとも

思はれるが、あつたにしても、ほんのそとをのぞ

くため位の、直徑の小さな圓であつたらう。

江戸時代に黄檗宗が入つてきて、宇治の萬福寺

といふ様な寺が建てられ、そこに圓窓が可なり大

規模に用ひられた。之れを見ると不調和なごころ

か、中々趣きがある。そこであちらこちらに用ひ

だしたのではないかと思はれる。尤も禪宗建築に

もあるが、皆多くは新しいものばかりで、圓覺寺

舍利殿や永保寺開山堂・觀音堂などにはついてゐ

ない。さうして黄檗建築には、割合に狹間飾の面

白い——といつても知れたものだが——のがある
點などを考に入れると、どうもさう思はれるので
ある。

現存の圓窓は其輪廓甚だ簡單で、たゞ壁に圓孔
を穿つた下地窓式のものから、ざつとした僅かの
くり方のあるの位まである。狭間飾に至つては
一層貧弱で、零即ち何もないのから、込み入つた
ので四角な格子を記崩し或は他の單純な型に組ん
だ位の範圍を出ない。

此を英佛獨あたりのゴシック式大會堂の直径が
四五十尺もあるやうな、どんでもない大きな狭間
飾の複雑を極めた圓窓とくらべると、まるで問題
にならない位貧弱極まるものである。印度の北の小
獨立國ブータン(Bhutan)の建築に、牡の孔雀が尾
をいつばいにひろげてゐるところを木彫(?)にし
て、圓窓の狭間飾にしてあるところが寫真版にし
て、或雜誌にのせてあるのをみたことがあつたが、

中々いゝ考へであると思つた。

何れの點からいつても、なさけないことに、比
べものにならぬ。其上に支那の眞似ばかりでは愈
以て幅がきかないが、また一方からいふと、白壁
に圓窓をあけて梅の枝を以て狭間飾にしたやうな
風雅なのは、我國でなければ見當らぬやうである
から、それ等で瘦我慢をしておくのが上分別らし
いことになる。

* * * * *

第三二八圖は弘前市最勝院五重塔初重内部の盲
窓である。伏鉢に寛文六年の銘があり、落成は同
七年といふが、江戸時代のものとしては、あらゆ
る點に於いて獨創的の意匠をこらしてある珍らし
く上出來の塔婆である。初重は内外共このやうな
裝飾窓がつけてあるが、外部は風雨にさらされた
結果、大分あらびてゐる上に、彩色等も剝落して
しまつてゐるから、はつきり判る内部の一つをと

つて例にあげたのである。

此窓は圓ではあるが幾分上下に平たい。横徑二尺乃至二尺一分、縦徑一尺九寸四分乃至一尺九寸六分、板は中でつぎ合してあるから、各の板が二分五厘から三分收縮してかゝる結果になつたものと想はれる。輪廓の幅八分五厘、金箔をおく。連子子の數十六、山より山まで一寸二分、谷深さ二分弱で綠青塗、さうして板は胡粉塗で眞白だから甚だ美しい。但し當初外部の窓も、これと同様の彩色がしてあつたかどうか、之れは今判らない。

第三二九圖は大和常麻寺塔頭「中の坊」の茶室の一の、窓といへば窓であるが、室と室との中間にあるのだから、出入口といつた方が適當かも知れない。「中の坊」にはたしか茶室が三つもあつたが、他にはこの様な曖昧なものはない。

此圓いところの後ろには敷居鴨居があり、引違紙貼障子がたてゝあるが、室内の模様を序に見せ

るため、特に障子をはづして寫しておいたのである。大きな圓で直徑約五尺五寸ある。

第三三〇圖はほんどうの窓で、これは立派に採光の目的を達してゐる。圓徑四尺五寸。當麻のに比べて一尺ばかり小さいが、それでも随分大きく見える。

醍醐寺三寶院は桃山時代の建築であることは私も承知してゐるが、この茶室は例の棚で有名な宸殿から裏の方へ行くところの右手に一段低く位置してゐるので、いつできたものか實は私は知らないものである。従て桃山か江戸か知らないが、少なくとも此窓は江戸とした方がいゝ思ふ。

第三三一圖から第三三四圖迄、四枚の圖に示したのは半圓窓である。時代も至極新しいし、圓を半分に分けた丈けのものなのに、何故に四枚もだしたかといふと、窓其物としては如何にもつまらないかも知れぬが、目先が變つてゐるのと、結果

が割合に面白いと思つたから、こんな窓を作つたら、どんな風に見えるかといふことを見せたいからである。

紀州の根來寺 (Néorôji) といつた方が、和歌山縣那賀郡根來村西坂本、根來山大傳法院といふより、どの位早判りがするか知れない。其根來寺の本坊は、本名大傳法院であるが、本坊といつた方が、これまた遙に通りがいゝ、だからこゝでは俗名——でいけなければ普通名稱——を用ひておくが、其本坊に屬する光明殿即ち本堂の一番の奥のつき當り、一段高くなつてゐるところの兩側にこの半圓窓がついてゐるのである。

第三三一圖は外からみたところで、柱を挟んで兩方に半圓形があるから、全體で完全な圓になるので、これなら花頭窓などは異なり、別段あぶないやうな感も起らず、さう不調和でもなし、割合によろしい。たゞ輪廓を途中でついでゐる其つ

ぎ目が少しく目立つてゐるのは、もう少し何とかなりさうなものだといふ氣がする。

圖に於いて右半分は白壁だから、左半分丈けが窓として効果がある。窓の縁を保護するためか、内側に添ふて薄い板をはりつけてあるのが、何といつても目障りで、殊に内部からみたときがひどい。夫れ丈けのことで、他に難はない。

第三三二圖は、前圖の窓を室内からみた所で、内側に片引の雨戸が一枚と障子が一枚とたつてゐる。其障子をしめてあるから、左の方の框のところ丈けは、はつきりしてゐるが、紙のところはぼんやりしてゐて、恰も半月がでたやうで中々趣きがある。そこで次の

第三三三圖は、其障子をはづしたところ。謂はゆる本坊客殿の一部が見えて、障子のしまつてゐる時と大分に異つた感がある。かうなると輪廓即ち窓枠の内側に打つてある薄い板が、途中でつい

であり、其ついである所で折れたやうになつてゐるから、これはない方がよろしい。此に向ひ合つてゐる半窓は次の

第三三四圖にだしておいたが、背景が斜面に植ゑてある躑躅や楓の樹であるから、前者と全く異つた趣きがある。

第三三五圖は大阪市難波の瑞龍寺佛殿右側面の窓である。窓枠は何にも裝飾のないある幅さをもつた大圓形で、其中心を通り直角に交叉せる軸で四象限に分ち、更に此交叉軸に平行に輪廓をとつて各象限内に一つづゝの殆んど正方形を入れ、かくしてこの直角軸の四隅にでき上つた方形のうち、一つづゝ卍崩を入れたのである。

故に若しこれで外の大圓が方形であつたなら、恰も第一七二圖の如きものになつた筈である。だからこの様な窓が、同代の同宗旨の建物についてゐるのは、當然過る位當然である。けれども輪

廓が四角と圓と、一は木製の半扉の裝飾であり、他は漆喰塗の窓の狭間飾であることにより、一見したところでは異つた感じを與へるのである。

第三三六圖は長崎市福濟寺青蓮堂内部脇の間の境の壁についてゐるもので、脇の間の奥の方へ採光のためと考へられる。枠には珍らしく線形があり、其内部に入れてある狭間飾の骨線になる縦横の木の用ひ方は、正に前例と同じで、たゞ四つの小正方形内を卍崩に組む代りに、更に四隅に一層小型の正方形が残る様、順環の順序 (Cyclical order) に狭間飾を入れると、丁度かくの如き形ができ上る。大阪にあるのも、長崎にあるのも、共に窓はさう變つてゐない。

第三三七・第三三八の二圖は、長崎市にある黄檗宗四福寺の一なる興福寺の、庫裏の西隣にある三江會所の門の兩方についてゐる圓窓で、一は外より他は内より見たところである。

三江會所の門は中央を通路とし、其左右に小室がとつてある、其小室の南北の壁に窓がついてゐるが、北のがこれで南のは四角な窓(出後)である。

會所は明治十四年に建て、大正九年擴張したさうだが、門の方は知らない。併しながら多分同じく明治十四年に建てたものらしく、従てこの窓も恐らく其時支那の大工がつくつたのもあらう。同寺本堂の窓(次圖参照)と共に、どうも日本の大工にはできさうもない位に純支那式である。

此狭間飾は何であるか。中心飾に昔の韓國の紋章の様な二つ巴がついてゐたり、蝙蝠がゐたり花がついてゐたり、さうした上下左右相稱に迷路の如く、或は合し或は離れ、いろいろの大きさ及び形の空間をつくりながら、銳角に直角に乃至鈍角に曲りくねつてゐる。第十四卷第一號に何だか判らないが、支那式のものだから饜飴か知らんと思つて、さうかも知れないといふやうなことを書いて

おいたが(第一〇二頁下段)、今になつてもやはり何だかよく判らない。

とにかく斯の如き窓は、全く輪廓内にうまくおさめた狭間飾だけを見せるのが目的らしい。この様な純支那式の窓をだしたのは、曩に唐居敷を解説した際に、福濟寺大觀門の夫れを圖示したのと同一の理由によつたのである。かうなると次の

第三三九圖の中央の圓いところも亦、此同類と言ひたくなる。言ひ度いばかりではなく、事實殆んど同一意匠で、大同小異である。其周圍の氷裂模様などは、如何に努力しても大和島根の大工小工には少しく荷が勝すぎてゐる様である。

本堂即ち大雄殿は寛永九年創建、後焼失し元祿二年再建、慶應元年暴風のため大破、明治六年解体、明治十六年再建、大正五年大修理を加へたのださうな。故に此窓は明治十六年のときのと考へられる。此時の再建には支那から大工がきたさう

だから、これ等は確かに彼等の手によりて組立られたものであらう。

第三四〇圖は黄蘗山萬福寺佛殿の窓。内側に切面をとつたほんごうの圓い孔で、寫眞には後方の障子をしめたところを寫してあるから、割合に美しく見えるが、これを兩方にかけて了へば、白い壁に赤く塗つた框の中になゞ黒い孔がある丈のことになる。此は最も簡單な例。

前圖もこれも、窓下の貫の上に平たく曲尺の二尺がおいてあるから、其大さは略知れやう。

第三四一圖は大和の國柳本(驛から約十町東)なる釜口山

長岳寺(Kama-no-kuchi-san Chō-gaku-ji)の庫裏、縁に面せる一室についてゐるもの。この極端に簡素で薩張したのと、例へばランスやパリーの耶蘇教大會堂の大圓窓と比較せよ。梅の切枝を窓を横切つて用ひた氣持は、西洋人には勿論、支那人にだつて判りはしまい。但し障子紙はもう貼り替へて

もいゝ時分であらう。室内から見ると、柳障子に日があたれば自然梅の枯枝がうつり、一層趣きがあらう。だから外からでも内からでも、何れからでも仲仲よろしい。障子を貼りかへると同時に、壁を塗りかへると尙更よからう。

最後に、第三四二圖に桂離宮構内にある茶室の一なる笑意軒(Shō-iken)の圓窓をだす。寫眞でみる如く鴨居の上に、中央の吊束の兩方に下地窓を六つ並べたのであるが、何故に斯く下の方へ並べたかといふと、室内の天井の工合によつたとほか思へない。單に外から丈けでみると、もう少し上げた方が遙によさうである。下地の骨の組ぐあひを一つ／＼異にしてゐるのは、同じものが六つも並んでゐるので、餘程注意をしたものと思はれる。

* * * * *
圓窓は江戸時代に入つてから相當に用ひられ

だったが、其流行の元は茶室建築よりは寧ろ黄
蘗建築にあつたらしい。框も狭間節も概して簡
單で、框はない場合(茶室笑意軒
長岳寺庫裏)から内外に細き
輪廓をとり其間は鈍き鋤を有するもの(福濟寺
青蓮堂)位
のところ。狭間節もない(萬福寺佛殿・根
來寺本坊本堂)のから迷
路の如き込み入つた(長崎市興
福寺本堂)のまで存在したが
簡單のが多いこと勿論であつた。民家にも多く
用ひられ、隨所の新舊大小各種の住宅に見出だ
すことができる。

圓窓終り

(昭和五年六月十日稿了)